

(3) 窯2新段階(第105～116図、PL24～27)

窯の構造(第105図)

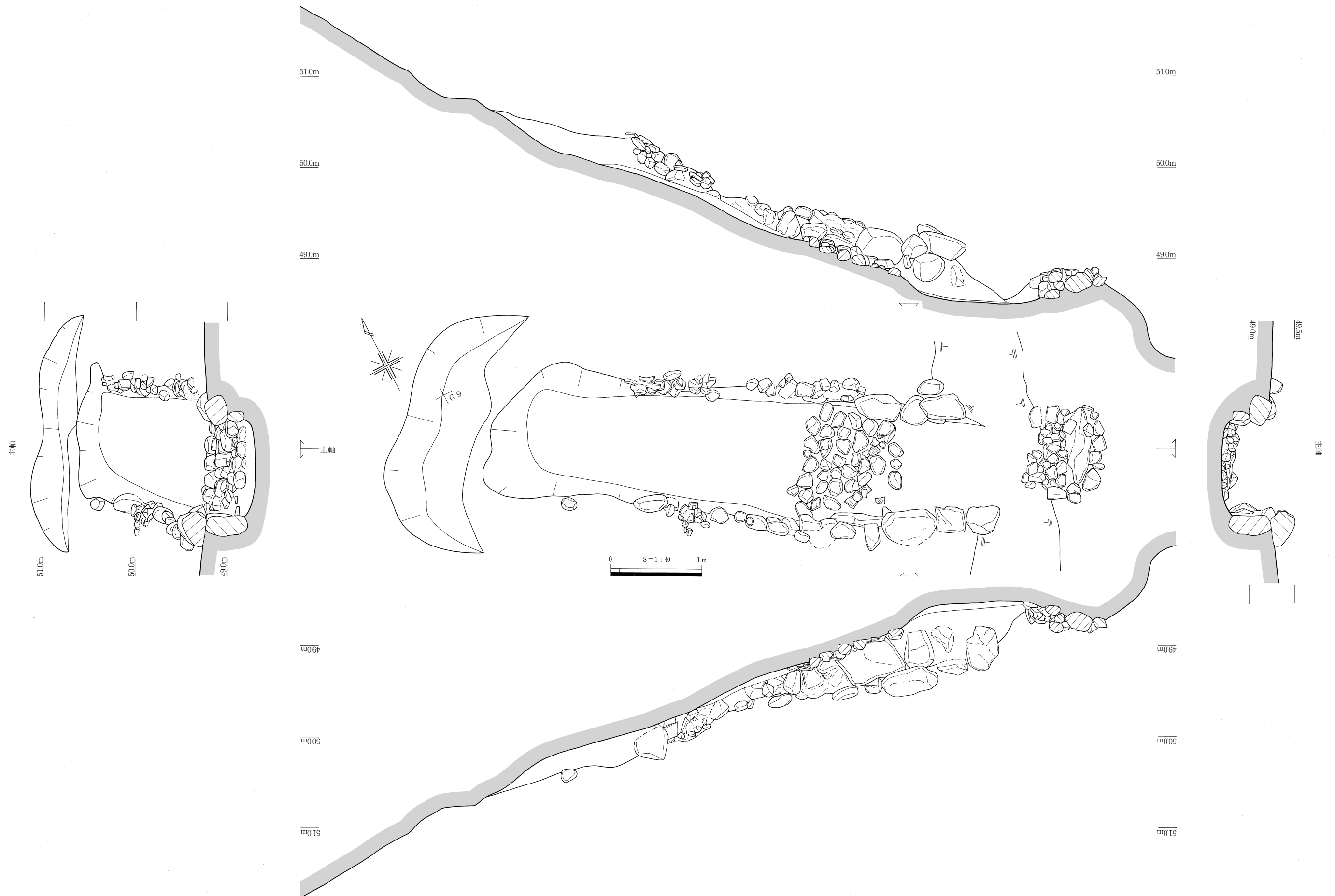
窯2新段階は、長さ6.8m、最大幅1.5mを測る。平面形は細長い楕円形だが、燃焼部から焼成部にかけては南北の側壁がほぼ平行し、窯尻のみが丸くなっている。

窯は、焚口の一部が道1によって破壊されているが、概ね全形が残っている。窯の2区東半の床面で階段状に並べられた礫を検出した。後述するが、これらの礫は石置台と考えられるので、2区以西が焼成部に、1区が焚口と燃焼部に相当すると推定できる。焼成部3区での傾斜角度は約25°を測る。燃焼部に相当する1区の床面は、焼成部床面とは傾斜が変化しており、窪みが形成されている。その底面は平坦で、焼成部に向けての立ち上がりやや急傾斜である。ただし、窯出しに伴う掻き出しによって燃焼部の床面が壊された可能性も考えられるので、これが機能時の形状を残していない可能性もあろう。

窯2新段階も天井架構式と考えられ、天井部の可能性が高い窯体片が新段階埋土からも比較的多く出土している。そのうち1点には、構築筋材の痕跡と思われる圧痕が観察できた。圧痕は凸型で、断面カマボコ形を呈し、その幅は2～3cm程度である(PL.109-5)。半裁竹管の内面による圧痕と考える。その他、2区の床面南壁際からあまり固結していない酸化焼成粘土塊がまとまって出土した。その出土状況からみて、側壁から天井部にかけての窯体が崩落した状態を残していると考えられる。これらの窯体片のすべてに地山礫が含まれているほか、スサが非常に多く観察できる。

新段階も、古段階同様、概ね全体に礫積みの側壁が確認できる。礫の見られない部分は、操業中や廃絶後に転落したと考えられ、実際に新段階埋土からは側壁礫と考えられる大小の礫が多く出土している。とくに、3・4区では径40cm程度の礫が多く出土しているので、窯尻付近の側壁にこれらの大型礫が用いられていた可能性が高い。側壁の礫の積み方は全体に粗雑である。古段階と同じく、大部分の壁面は径30cm前後の垂角礫や垂円礫を用いて構築されている。側壁礫のなかには、古段階から継続して使用されているものも少なくない。また、礫と合わせて瓦片も壁材として多く使用されている(第104図：231～233など)。礫や瓦の間や裏には大量の込め土が用いられており、込め土が焼成固化しているので礫や瓦自体は安定している。燃焼部付近の側壁には、古段階側壁に用いられた礫をそのまま継続利用しているものを中心に、径50cm以上の大型垂角礫が用いられている。礫の石材はすべて安山岩で、粒度の高い結晶質のものが多く、これらの礫も多くが焼成によって変質している。燃焼部・焼成部東側(1・2区)側壁の礫には、還元焼成によって色調が暗灰色に変化し、表面や斑晶が溶けたものが多く見られるほか、焼成部西側や窯尻付近(3・4区)の側壁礫は酸化焼成によって赤化するものが少量見られる。

焼成部2区では、径20cm程度の垂角礫や垂円礫を配置した石敷きの床面を検出した。礫は短軸(南北)方向に6ないしは7列に並べられている。窯の主軸と礫の並びは、若干傾きがありつつも、ほぼ直交する。礫の並びは垂直的には階段状を呈しており、西側の列が順に約5cmずつ高くなっている。これらの礫の石材は側壁礫と同種の結晶質安山岩である。また、これらの礫はすべて被熱によって暗灰色に変色しているほか、ほとんどが表面や斑晶が溶けている。なお、礫敷きのなかには、礫の代わりに大振りの瓦片や須恵器甕片が用いられている部分もある。これらの瓦片や須恵器片も二次焼成によって完全に還元焼成となっているほか、表面が溶解している個体もある。この石敷きは、その構造から見て、いわゆる石置台と考えられる。



第105図 窯2新段階遺構図

遺物の出土状況(第106・107図、PL26・27)

新段階の遺物数は古段階に比べて少なく、埋土、床面直上ともそれほどまとまった量は出土していない。須恵器片352点、瓦片81点出土し、窯1や窯2古段階に比して瓦の割合が高い。

埋土出土遺物では8層出土のものが多く、最終操業に伴う遺物が主体と考えられる。

床面直上では、2区西側から3区東側にかけて遺物がややまとまって出土した。瓦の割合が非常に高く、その多くは側壁に使用されていたと考えられる。これらの瓦はほとんどが還元焼成している。ただし、一部の瓦は後述の須恵器と同じく、焼台に転用された可能性もあろう。瓦以外の遺物は、基本的に最終操業時に床面に残置されたものと考えられる。床面直上出土の須恵器は、甕片、甕片転用焼台が主体となる。焼台に分類していない甕片にも二次焼成を受けて還元焼成化し、表面が溶けているものが多く見られる。おそらく、これらは焼台として使用されていたと考えられる。また、235の須恵器高台杯、239の須恵器皿は底部を上にして出土し、焼台として使用されていた可能性があろう。石置台の上からも瓦片や甕片がいくらか出土しており、これらも転用焼台であった可能性が高い。以上のように、床面直上出土の遺物には焼台として使用されたものが多く含まれると考えられる。

新段階出土遺物(第108～114図、PL72・84・111・112-1)

先述のように、窯2新段階の遺物には焼台や転落した側壁材を多く含むと考えられるので、新段階最終操業時の製品としての一括性は低い。

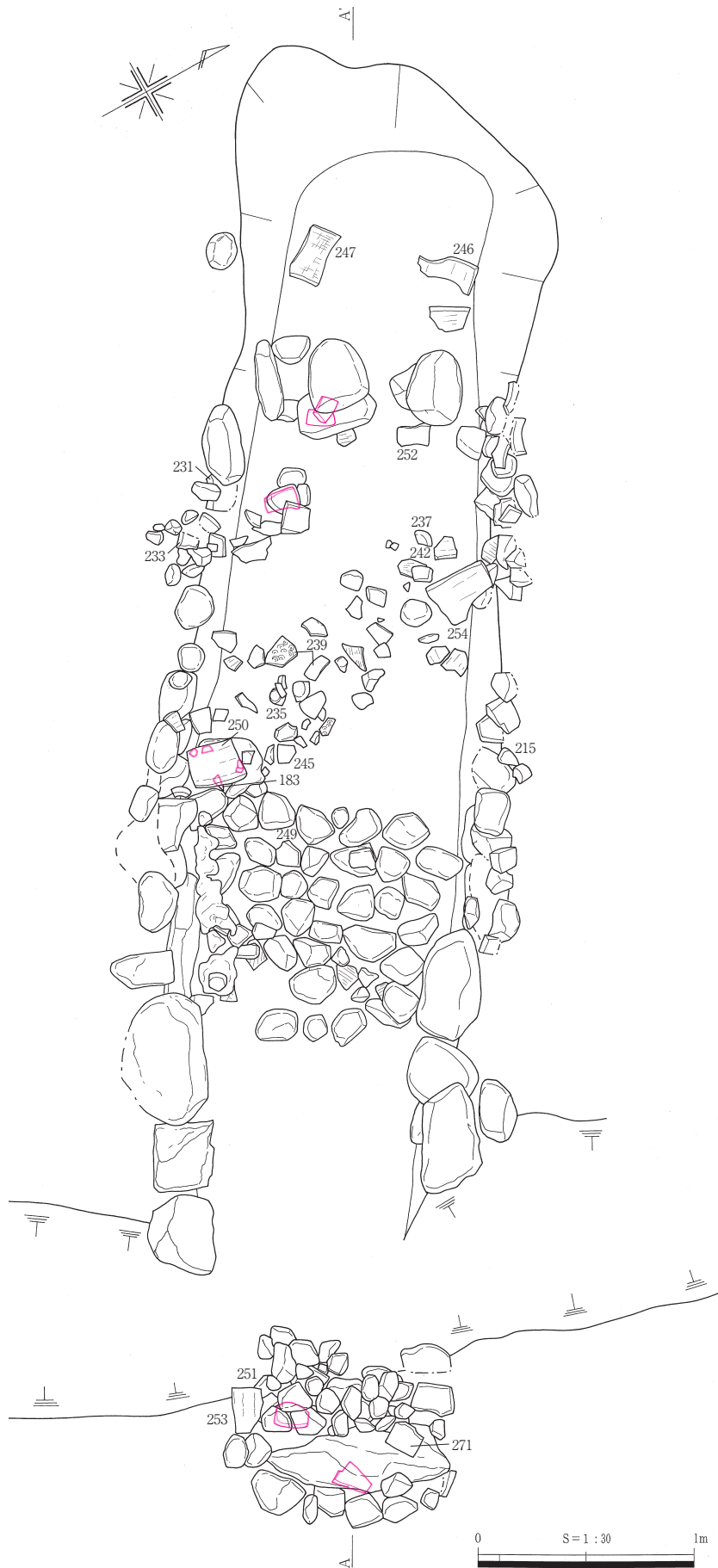
234～242が須恵器で、㊸が製鉄関連遺物、243～259が瓦である。

須恵器は、235・236・239が床面直上から出土している。234・235は高台杯、236～238は杯、239～241は皿である。いずれも特徴が古段階出土資料に極めて類似している。なかでも杯は古段階埋土出土の178～188のグループと調整の特徴が一致している。これらの杯皿類は、古段階の焼成品が混入したか、焼台とするために意図的に持ち込んだのであろう。242は須恵器甕片の転用焼台である。表面に直線的に粘土が付着しており、裏面には溶融した安山岩が付着している。表の粘土は瓦の端面が熔着した可能性が高く、裏の安山岩は石置台と接触して付着したと考えられる。この資料は窯2新段階で瓦が焼成されていた可能性を示唆するものといえよう。

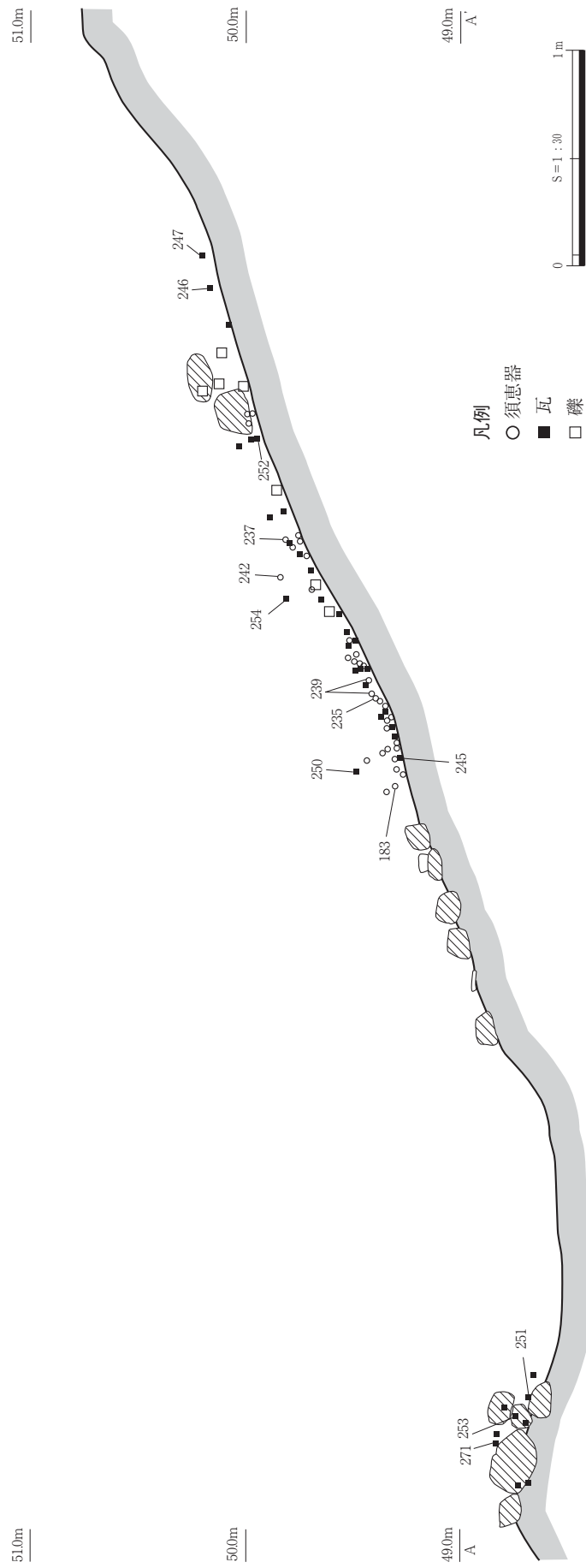
㊸は炉内滓で、窯2からはその他に炉内滓1点、炉底塊1点が出土している。いずれも製鉄炉周辺から偶然混入したものであろう。

瓦もほとんどが床面直上から出土したものである。先述のように、その多くは側壁に用いられていた瓦片が転落したものであろう。実際に243・245・249・251は、新段階床面直上出土の破片と新段階側壁中出土の破片が接合している。とくに243は意図的に分割された可能性の高い規則的な割れ方をしている。なお、243は古段階埋土出土の破片も接合しているので、焼成されたのは確実に新段階以前である。そのほかの新段階側壁出土破片が接合した個体も、基本的に新段階以前の焼成と見てよいだろう。

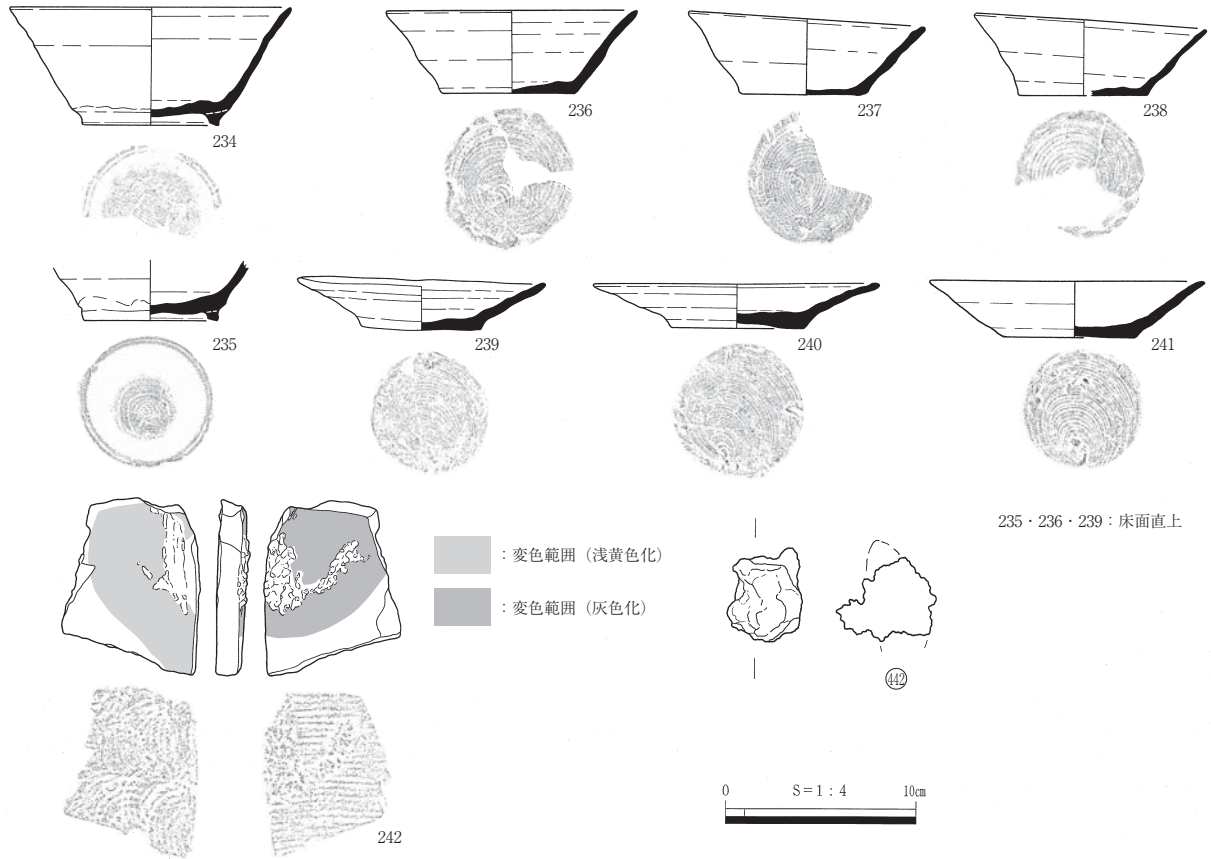
243～258が平瓦である。243は本遺跡内から出土した資料の中で最大の法量をもつ平瓦で、重量は10kgを測り、通常の平瓦に比べ極めて重い。広端面はナデ調整が施されているが、必ずしも丁寧とはいえない。凸面に布目の圧痕が一箇所みられるが、意図的なものではないだろう。249・255は平行タタキ、251は細かな平行タタキの痕跡が凸面にわずかに残る。251は凸面に丁寧なタテケズリ調整が施され、258は指オサエが顕著となり、窯2出土瓦のなかでやや特異である。259が丸瓦である。



第106図 窠2新段階遺物出土状況図(平面分布)



第107図 窯2新段階遺物出土状況図(垂直分布)



第108図 窯2新段階出土須恵器・製鉄関連遺物

埋戻し土出土遺物(第115・116図、PL84・85-1・111-1)

窯2新段階廃絶後の埋戻し土である5・6層からは多くの遺物が出土している。これには焚口周辺に掻き出されていた、窯2の焼成品が多く含まれている可能性が高い。

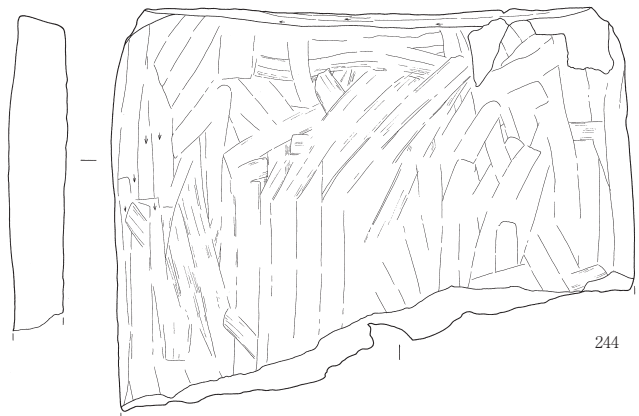
260～268は須恵器、269～271は瓦である。

260・261は高台杯、262～265は杯、266・267は皿で、268は水瓶形長頸壺である。杯皿類は大半が窯2古段階出土資料に特徴が類似している。なかでも、262・264は窯2古段階埋土出土の杯178～188のグループと同じ特徴をもつ。268の水瓶形長頸壺は一般的な長頸壺より小型で、型頸部付け根には突帯が巡っている。

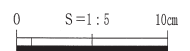
269～271は平瓦である。269が古段階埋土、新段階床直、埋戻し土の接合資料であり、270が古段階埋土、271は新段階床直出土である。269は凸面表面にスサの圧痕がみられる。270は色調が変化した円形の範囲が見られ、焼台に転用されていた可能性が高い。271は凹面に細布が残り、凸面は工具による雑なナデ調整が施されている。



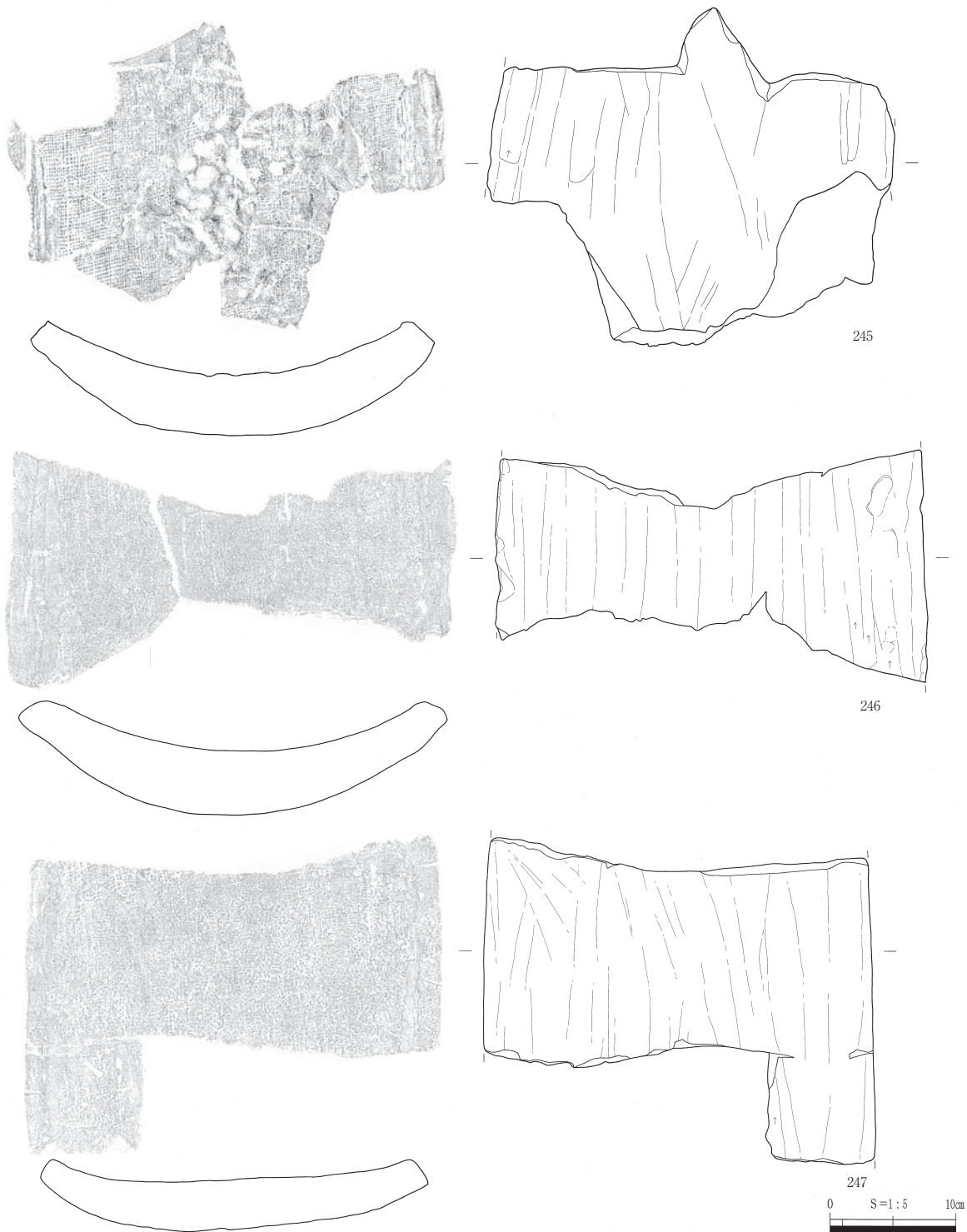
243



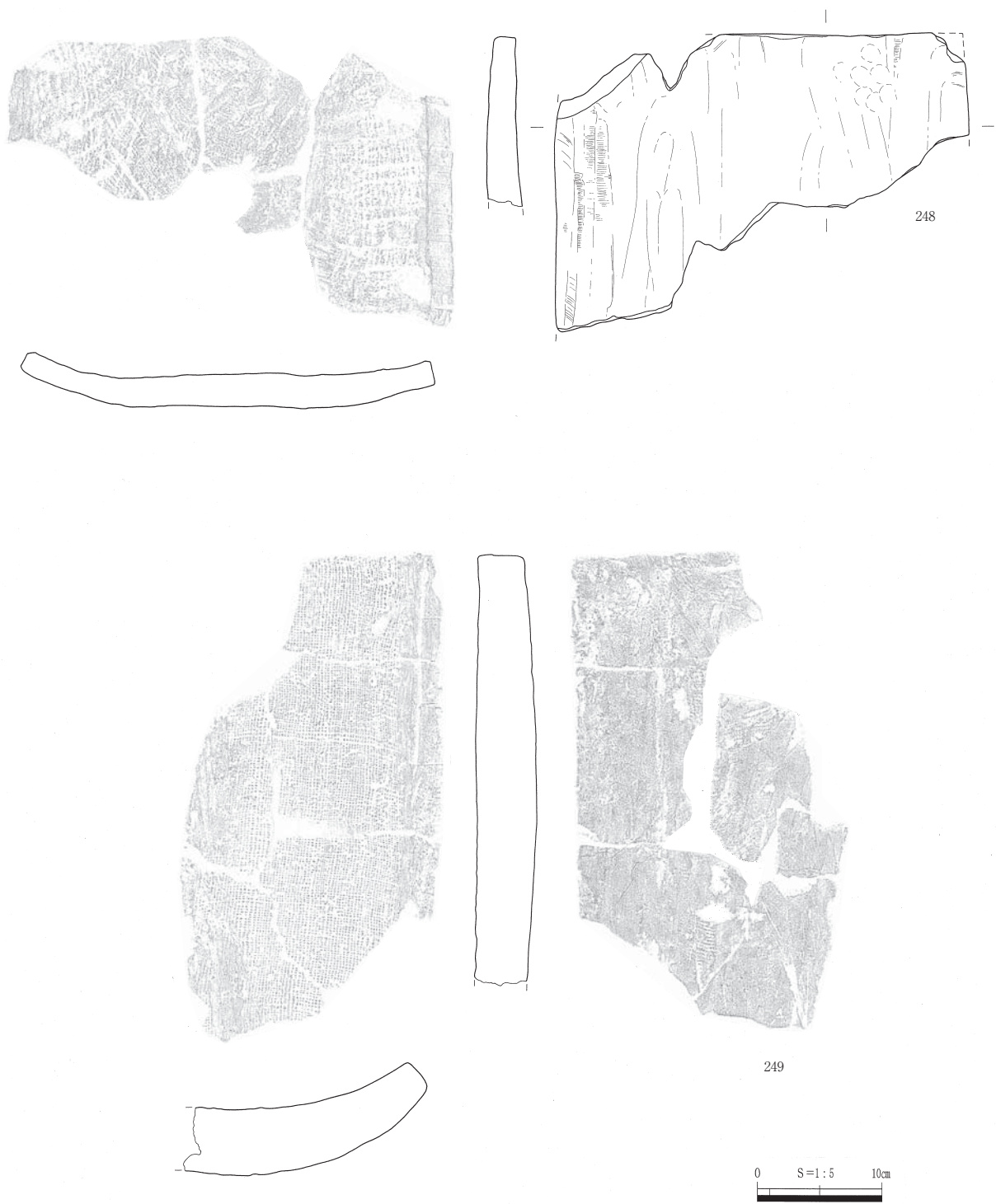
244



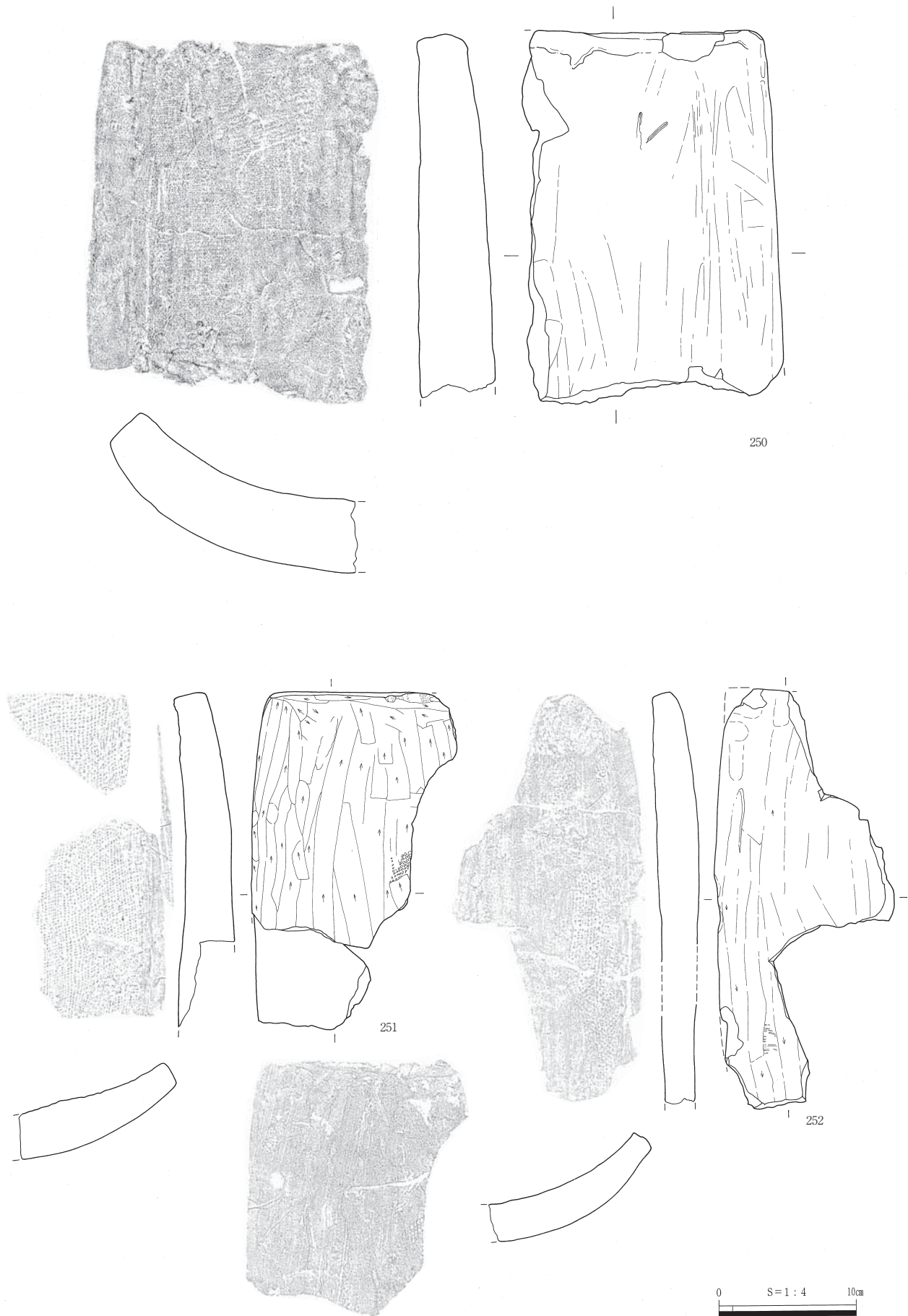
第109図 窯2新段階出土瓦(1)



第110図 窯2新段階出土瓦(2)



第111図 窯2新段階出土瓦(3)



第112図 窯2新段階出土瓦(4)